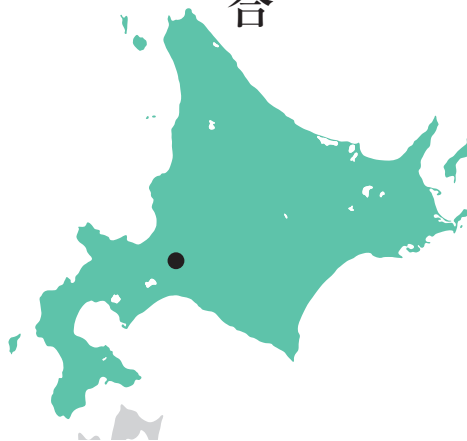


# 柳原 孝一 さん

国産子実コーンの魅力は高い生産性  
畜産農家との連携で府県にも広がる

北海道長沼町  
北海道子実コーン組合



日本が年間に輸入するトウモロコシの数量は1500万ト。多くが飼料原料となる。一方で国内の子実コーン(子実用トウモロコシ)の生産量は1万ト余り。輸入量のわずか0.1%に満たないが、10年前にほとんどゼロからスタートした成長ぶりには目を引く。日本の子実用トウモロコシをけん引してきた柳原孝二さんは、高い労働生産性の魅力と、安定した国産原料を求める畜産農家の声

の機械収穫を試験しました。日本で飼料用トウモロコシは、成熟前の青刈りをサイレージにして家畜に与えるのですが、海外では子実を収穫するのが一般的。麦や大豆の海外製コンバインも持っていたし、試験場のお手伝いをするタイミンゲで、うちの6畝の畑で植え始めたのが最初です。それが11年のこと。どうせ試験するなら自分でもやろうと考えたわけです。

——なぜ子実用トウモロコシに関心を持ったのですか。

**最初の狙いは連作障害対策**  
——栽培を始めたきっかけを教えてください。

柳原 当社と同じ長沼町内にある北海道立中央農業試験場が、2009年から3年間、飼料用トウモロコシ

直に言うとう、トウモロコシをいっばい採ろうというよりも、「小麦や大豆の収量が増えたらいいな」という気持ちが大きかったですね。

トウモロコシは根を深く張るため、土壌改良効果が期待できます。サイレージにするのと違って収穫する子実以外は畑に残り、土壌の栄養分にもなる。トウモロコシを輪作の一つに入れてから、確実に連作障害が減って麦や大豆の品質や収量が向上しました。

——周りの農家はどのように見ていたのでしょうか。

柳原 最初は「珍しいことやってるな」という感じで見てたと思いますよ。それでもトウモロコシを試した農家の大豆の出来がよいので、畑を見た近所の農家が栽培を始め、それ

をまた別の農家が見てまねてというふうにして増えました。自分の目で見て効果を確かめられると意欲が違います。機械化で労働生産性が高いことも魅力的でしょうね。

空知地方で栽培が始まり、全道に広がって、近年では九州など全国にも拡大しています。日本国内の飼料用トウモロコシの需要は1000万ト以上です。需要はまだ増える余地がありますよ。始めた時にはこんなに大きく広がるとは思っていませんでした。

**安価な輸入が国産トウモロコシ一掃**  
——かつては日本でも子実用トウモロコシを栽培していました。

柳原 今、日本全体で2700畝、1万5000トぐらいまで子実用ト



北海道子実コーン組合代表理事の柳原孝二さん＝長沼町の事務所で

ウモロコシの生産が増えました。10年前にはほとんどゼロでした。

ただ、統計を見ると、国内で1960年ごろまで4万総ぐらい子実用トウモロコシの栽培面積があった、零細な畜産農家が栽培していた歴史があります。機械化でできなかった、手で収穫して家畜に与えるとか、ものすごい手間をかけていました。

その後、米国の安価なトウモロコシが大量に輸入されるようになると、国産が一掃されてしまったのです。

——国産が輸入に切り替わったわけですね。

柳原 そのとおりですが、輸入があったから日本の畜産業が急成長できた側面があります。機械化できない国産の子実用トウモロコシでは畜産農家は耕作に時間がかかり、家畜の飼養頭数を増やせません。一方で輸入トウモロコシ主体の配合飼料は、業者へ電話すれば配送のトラックが来て畜舎の横のエサ貯蔵タンクに入れてくれる。しかも安価。畜産農家にはとても便利で、思い切って規模拡

大に踏み出せました。

——再び子実用トウモロコシが増えているのはなぜですか。

柳原 一つは政策的な支援が大きいです。ほとんどの子実用トウモロコシ栽培は水田活用の直接支払交付金制度の対象で、戦略作物助成のなかの「飼料作物」として10<sup>㍗</sup>当たり3万5000円の支援を受けています。生産性の高さに注目した加算や地域からの助成を加えると、もう少し補助金が高くなります。

連作障害に悩んでいた大豆や小麦

#### Profile

やなぎはら こうじ  
北海道長沼町出身、1979年生まれ。秋田県から北海道に入植した4代目。大学時代に父親が地元農協の専務に就任したため、学業を続けながら農業に従事した。現在は有限会社柳原農場の社長で、北海道子実コーン組合と日本メイズ生産者協会の代表理事。農場の今年の作付けは、小麦が22<sup>㍗</sup>、大豆が5<sup>㍗</sup>、子実用トウモロコシが13<sup>㍗</sup>、ナタネが4<sup>㍗</sup>。ほとんどが水田に作付けており、一部は畑地に転換した。

#### Data

北海道子実コーン組合  
柳原氏が2011年に子実用トウモロコシ栽培を始め、2年後の13年に近隣生産者が栽培に加わった。15年に27戸、97<sup>㍗</sup>の規模で、空知子実コーン生産者組合を設立。16年に組合員の広域化に伴って北海道子実コーン組合に改名した。19年に長沼町で簡易型サイロ(5000<sup>㍗</sup>を2基)を稼働。20年に長沼町と岩見沢市の2カ所に集出荷拠点施設を整備した。合計貯蔵能力は1万<sup>㍗</sup>。組合員数は151で、各戸の平均的な作付面積は6<sup>㍗</sup>。柳原氏が中心となって全国の子実用トウモロコシ生産団体と22年に日本メイズ生産者協会を設立した。

の生育がよくなると収量が伸びる。当然、出荷量が増加し交付金も増えるので、経営への影響は単純にトウモロコシ分だけにとどまりません。

半世紀前と違って、大型のコンバインなど子実用トウモロコシの機械化が進み、労働生産性は飛躍的に向上しました。10<sup>㍗</sup>当たりの所得は主食用米などに比べて少ないですが、労働時間がはるかに短くて済むのが魅力です。農林水産省の調査では10<sup>㍗</sup>当たり労働時間は1・2時間。本州では実際にはこの数字よりも大きいですが、20時間を超す主食用米や5・6時間とされる小麦や大豆よりも短い。10<sup>㍗</sup>当たりの収量は1<sup>㍗</sup>近くあります。

輪作に組み込みやすく、手間が掛からず収益性もよいことが、農家に受け入れられたのでしょうか。

使う側である畜産農家の事情もあります。近年はトウモロコシの国際相場が上昇し、円が安くなるなかで飼料価格が高騰。各地で国際紛争も起きています。「海外にばかり頼っているのか」という機運が高まったことも背景にあると見ています。

#### 水田と畑作の政策見直しに関心

——政府は水田と畑作の農業政策見直しを検討します。

柳原 子実用トウモロコシの場合、政策面の後押しが欠かせません。新制度に移行するとされる2027年に向け、国会などで長期的な農政の議論が進むでしょう。もちろん注目しています。

長沼町はもともと水田地帯です。私が就農した時には50分の経営の半分が水稲で、残りが水田転作作物の小麦と大豆でした。今や水稲は2分の1に減りました。麦・大豆など転作作物に対する水田活用の交付金が経営を支えています。

トウモロコシの輸入価格が下がったから「国産はもういらぬ」と言われると、国内で安定的な生産が難しくなります。食料安全保障の見地からも輸入に依存するトウモロコシの一部、たとえば1割を国内産で置き換えるような目標を掲げ政策を組み立ててほしいと考えています。

——子実用トウモロコシの販売先はどんなところですか。

柳原 主に採卵鶏の農家向けです。養鶏は飼料効率がよく、国産トウモロコシから多くの卵を作れます。国産を使っている卵であることを消費者に伝え、ブランド向上に役立てている農家が多くいます。

しかし、海外産に比べると国産はどうしても割高になります。飼料効

率を考えた際、牛肉だと10%以上の穀物を与えても1kgの肉にしかなりません。その分コストがかなり上昇してしまふ。酪農も出荷する際に他の酪農家の生乳と混ざることが一般的で、一部の農家が国産子実用トウモロコシを与えても、コスト上昇の見返りを得にくいのが現状です。

別の課題もあります。子実用トウモロコシは重量当たりの単価が低い。ため、運送会社は長距離輸送のメリットを感じにくいというものです。福岡県では生協が輸送を引き受ける事例もあります。

耕畜連携を基本に、多様な人たちが協力して子実用トウモロコシの利用が広がると望ましいと思います。

——乾燥や保管はどうしていますか。

柳原 収量の多いトウモロコシは面積が増えると、既存の乾燥機だけでは間に合わず、施設の改修や海外の高性能乾燥機の導入も進んでいます。トウモロコシ専用の乾燥機がいるし、どこにトウモロコシを保管するのかわかりません。必要があります。

最初はトウモロコシをフレコンバックに入れ農機倉庫の片隅に置きましたが、数量が増えると専用の穀物サイロが必要です。畜産農家は周年でエサを使うから、私たちが貯蔵施設を持つ必要があるわけです。

イタリアに行つて、5000t規模のサイロを購入して北海道に運び、最初に建てたのが2019年ですね。今は500tと1000tのサイロを会社として7本所有しています。今後は、1500t規模の大きなサイロをさらに5本建設する予定です。

## 飼料工場の隔離義務が障害

——飼料工場のサイロにまとめて貯蔵はできませんか。

柳原 それがなかなか難しい。

輸入する飼料用トウモロコシは関税が掛かりません。一方でトウモロコシでんぷんを利用する用途で輸入すると関税が掛かります。その関税収入でバレイショなど国産でんぷん原料の支援に使う仕組みです。どちらもまったく同じトウモロコシですが、別々に隔離されています。

国は飼料メーカーに対して無税の飼料用トウモロコシを別扱いで製品にすることを義務づけています。国産と一緒に原料タンクに保管することとはもちろん、配合飼料の製造過程で混じることも禁じていました。

そのため、顧客からバラバラと飼料の注文が入れば、そのたびに長沼町から遠い飼料工場まで原料トウモロコシを運ぶ必要があります。人手不足に悩む運送会社は、不定期な荷

物輸送は扱いにくいですよ。やむを得ず私たちの関連会社でトラックを揃え、運転手を雇って配送を担うようになりました。

規制は少しずつ改善してきたのですが、子実用トウモロコシ栽培を増やすには、国産を全国の飼料工場に使いやすいしてほしいと思います。輸入も国産もそれぞれ、受け入れる際に厳密に重量を計るので、きちんと管理すれば問題は生じないはず。

——飼料用以外の需要も増えているそうですね。

柳原 生産するトウモロコシの2割が食用に回っています。具体的にはコーン茶向けですね。北海道では以前からポピュラーだったのですが、2024年から大手飲料メーカーが全国展開して増えました。最初は道内で数千ケースから始まったコーン茶が、百万ケース単位で売れるようになってきました。

もう一つはウイスキー原料向けです。グレーンウイスキーはトウモロコシなどを蒸留しますが、原料は海外に頼っていました。国内数社に納入を開始しており、すでに販売されています。世界で人気のジャパニーズ・ウイスキーは原料まで国産になってほしいですね。

(ジャーナリスト 山田 優)

